

「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」研修 の長期的教育効果と教育支援の展望

－平成24年度から平成26年度の研修生への調査を通して－

庄司麻美¹⁾、橋本理恵子²⁾、森本悦子³⁾、藤田佐和⁴⁾

(2017年9月27日受付, 2017年12月18日受理)

Nursing Training Program Fostering High Quality Nursing Practices in Home Cancer Care
－Long-Term Effects of Educational Training and Approach towards Educational Support:
from a Study with Trainees between 2012 and 2014

Mami SYOUJI¹⁾, Rieko HASHIMOTO²⁾, Etsuko MORIMOTO³⁾, Sawa FUJITA⁴⁾

(Received : September 27, 2017, Accepted : December 18, 2017)

要 旨

本研究は、「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」研修修了生が修得した内容を実践の場でどのように活用しているか、長期的な教育効果を明らかにし、在宅がん看護の質向上のための教育支援の示唆を得ることを目的とする。修了生27名を対象に、看護実践における研修で得た学びの活用状況、在宅がん看護における実践力の変化などについて、無記名自記式質問紙調査を行った。本研修の長期的な教育効果として、修了生のがん看護実践力の向上に寄与し、学習への動機づけを高め行動変容をもたらしていること、および本研修で習得した知識や技術が、修了生により所属スタッフや多職種まで波及していることが明らかになった。在宅がん看護の質向上に向けて、調整役割の基盤となる能力の養成、看護倫理や調整機能について実践に即した継続的な学習支援、修了生相互のネットワークづくり、および困難感への対処を支える専門的な知識・技術の習得に関する教育支援が必要であることが示唆された。

キーワード：在宅がん看護、人材育成、長期的教育効果

Abstract

This study aimed to understand how trainees are applying their acquired knowledge in nursing practice and to elucidate the long-term effects of education. This study also aimed to obtain suggestions for educational support in order to improve home cancer care. We targeted 27 trainees and conducted an anonymous self-administered survey regarding the use of knowledge acquired during training in their nursing practice, and the changes in practical skills in home cancer nursing care. The study revealed that education has long-term effects on the improvement of trainees' practical cancer nursing skills and

-
- 1) 高知県立大学看護学部看護学科 助教
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Assistant Professor
 - 2) 大分大学医学部看護学科 助教
School of Nursing, Faculty of Medicine, Oita University, Assistant Professor
 - 3) 高知県立大学看護学部看護学科 准教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Associate Professor
 - 4) 高知県立大学看護学部看護学科 教授
Department of Nursing, Faculty of Nursing, University of Kochi, Professor

increased motivation for learning and bringing about behavioral changes. In addition, the knowledge and skills acquired during the training are being disseminated among staff members in the current trainee department as well as across many professions. The study suggests that in order to improve home nursing care for cancer, it is necessary to support the development of the fundamental ability that becomes the basis for coordination role, to provide continuous support for learning nursing ethics and coordination functions that can be used in practice, to facilitate networking among the trainees, and to help them acquire specialized knowledge and skills that would support dealing with difficult situations.

Key words: Home cancer nursing care, Human resources development, Long-term effects of education

I. はじめに

平成18年に制定された「がん対策基本法」に基づき策定されたがん対策推進基本計画では、がん患者の意向を踏まえ、住み慣れた家庭や地域での療養を選択できるように、在宅医療の充実を図ることが求められている。その中で、がん治療を継続する患者の退院時の調整および療養支援の体制整備、在宅で療養するがん患者の疼痛緩和及び看取りまでを含めた終末期ケアの体制整備が推進されている¹⁾。

このような現状に鑑み、高知県立大学では、在宅移行支援の必要ながん患者や在宅看取りを希望する家族に対する看護ケアの充実を目指し、中国・四国高度がんプロ養成基盤プログラムのもと、平成24年度より「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」による在宅がん看護の教育コースを開講している。本コースは、高知県の在宅医療に携わる多職種と協働して講義-演習-実習をつなげた15日間の現任教育プログラムであり、「患者・家族の意思決定支援や看取り支援など、様々な場面において、多職種チームのコーディネーターとして機能し、在宅移行や在宅看取りを支援できる専門性の高い看護師を養成すること」を目的としている。

がん看護の質向上に向けた教育について、在宅看護に関連した研修では、院内看護師を対象に在宅医療勉強会や開業医・多職種を対象に在宅医療研修が行われており、目標到達度や能力の変化か

ら評価を得ているもの^{2) 3)}、看取りのケアに対する自信・意欲、実践、困難感、知識から訪問看護師のスキルや実践を評価しプログラム評価を得ているもの⁴⁾が報告されている。また、看護師を対象とした緩和ケア教育について、看護実践への活用、自己の姿勢・態度の変容、看護実践への活用や自己の姿勢・態度の変容に関する理由、スキルアップ、施設・地域での役割から研修の教育効果を評価しているもの⁵⁾、研修内容の理解度と学びから研修評価を行っているもの⁶⁾などが報告されている。

研修評価について、Kirkpatrick's four levelsは、Level 1. 学習者の反応(満足度)、Level 2. 態度・知識・技術の習得度、Level 3. 行動変容度、Level 4. 組織や患者への成果のステップで進めることを推奨している⁷⁾。これまで、「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」は、単年ごとに研修終了時に調査を行い、Level 2. 態度・知識・技術の習得度について短期評価を重ねてきたが、修了生が各施設で、本研修で学んだことを実践の場でどのように活用し実践しているか、長期的な教育効果は明らかにしていない。そこで、本研修の今後の方向性を検討するために、研修後の長期的な教育効果として、知識や技術の活用およびLevel 3. 行動変容度に焦点をあて、評価を行う必要があると考えた。

II. 研究目的

本研究は、平成24年度から平成26年度までの過

去3年間の「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の修了生が、研修終了後に修得した内容を実践の場でどのように活用しているかを明らかにし、長期的な教育効果を評価する。すなわち、本研究では研修プログラムの短期評価だけでなく、研修や研修成果が地域社会にどのように波及しているのかを評価する。これらを通して今後の在宅がん看護の質向上のための教育支援の示唆を得る。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

実態調査

2. 調査期間

平成28年2月～平成28年3月

3. 対象者

平成24年度から平成26年度「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」修了生27名のうち、研究協力への同意が得られた者。

4. 調査項目

質問紙は、①看護実践における研修で得た学びの活用状況、②在宅がん看護における実践力の変化、③自己研鑽やスキルアップなど在宅がん看護に取り組む姿勢の変化、④看護実践における新たな取り組み状況、⑤在宅がん看護を实践する上で感じる困難と困難への取り組み、⑥在宅がん看護を实践する上で希望する教育支援や取り組み、および修了生の属性から構成した。

①看護実践における研修で得た学びの活用状況は、20の研修項目ごとに習得できる知識・技術を提示し、現在の在宅がん看護の実践において活用しているものすべてについて選択方式とした。

②在宅がん看護における実践力の変化は、6つの研修目標における在宅がん看護の実践力がどのように変化したか、「看護実践力は向上した」「看護実践力に変化はみられない」「看護実践力は低

下した」の3つの選択肢を設定し、選択理由を自由記載とした。「看護実践力は向上した」と回答した方に本研修全体を通してどのようなことが実践力向上に役立ったのか、自由記載とした。また、研修目的以外での自身の看護実践力の変化について、「変化がみられたと感じられる」「変化がみられたと感じられない」の2つの選択肢を設定し、「変化がみられたと感じられる」と回答した方にどのような変化があったのか、自由記載とした。

③自己研鑽やスキルアップなど在宅がん看護に取り組む姿勢の変化は、「変化がみられた」と「変化はみられない」の2つの選択肢を設定し、「変化がみられた」と回答した方にどのような変化があったのか、自由記載とした。

④看護実践における新たな取り組み状況は、研修修了後からの在宅がん看護の実践活動について、「新たな取り組みを行った(行っている)」「新たな取り組みは行っていない」の2つの選択肢を設定し、「新たな取り組みを行った(行っている)」と回答した方にどのような取り組みを行ったのか自由記載とした。

⑤在宅がん看護を实践する上で感じる困難と困難への取り組みは、「困難を感じることもある」「困難を感じることはない」の2つの選択肢を設定し、「困難を感じることもある」と回答した方に困難に感じること、および困難への取り組みについて自由記載とした。

⑥在宅がん看護を实践する上で希望する教育支援や取り組みは、自由記載とした。

5. データ収集方法

無記名自記式質問紙を用いて郵送法で行った。研究の主旨・研究への協力依頼・倫理的配慮についての説明文書とともに質問紙、返信用封筒を郵送し、回収した。

6. データ分析方法

記述統計を用い、自由記載項目については質的帰納的に分析を行った。

7. 倫理的配慮

調査は、高知県立大学研究倫理委員会（看研15-63）の承認を得て実施した。

文書を用いて、研究の主旨、目的とともに、自由意思の尊重、プライバシーの保護、心身の負担と不利益への配慮、研究協力者が受ける利益や看護上の貢献、研究結果の公表について説明した。研究協力への同意は、質問紙の回答および返信をもって得られたものとした。

IV. 結果

9名から回答を得て（回収率30.0%）、有効回答8名を分析対象とした。対象者の修了年度は、24年度5名、25年度1名、26年度2名であり、訪問看護未経験が2名であった。

1. 看護実践における研修で得た学びの活用状況（図1）

対象者は、各々3～20の複数の研修内容を活用しており、7名が「在宅がん医療と薬理」と「疼痛緩和」について、6名が「在宅がん患者と栄養」「在宅がん患者とコミュニケーション」「在宅がん終末期におけるフィジカルアセスメント」について、活用していた。これらのうち、3つが在宅医

療や看取りに必要な支援の調整と看護実践に関する目標であり、2つが在宅がん患者の身体管理に関する目標であった。

2. 在宅がん看護における実践力の変化（表1）

在宅医療や看取りに必要な支援の調整と看護実践、在宅がん患者の身体管理および在宅チームメンバーと協働した在宅看取り過程への看護実践に関する3つの目標について、6名が、在宅がん看護実践力が「向上した」と回答した。しかし、デスカンファレンスの場の調整に関する目標で6名が、退院前カンファレンスの実施とコーディネーター機能に関する目標で4名が、「変化はみられない」と回答しており、時間確保の難しさや技術不足を理由にあげていた。研修目的以外での自身の看護実践力に変化については、7名が「変化がみられたと感じられる」と回答し、1名が「変化がみられたと感じられない」と回答していた。本研修全体を通して実践力向上に役立った内容について、「アセスメントの視点の拡がり」、「講義だけでなく演習や見学実習により理解が深まり、実践に役立つ知識や技術が身についた。」「他施設の看護師との交流、情報交換、関係作り」などの意見が多くあげられていた。変化がみられたと感じら

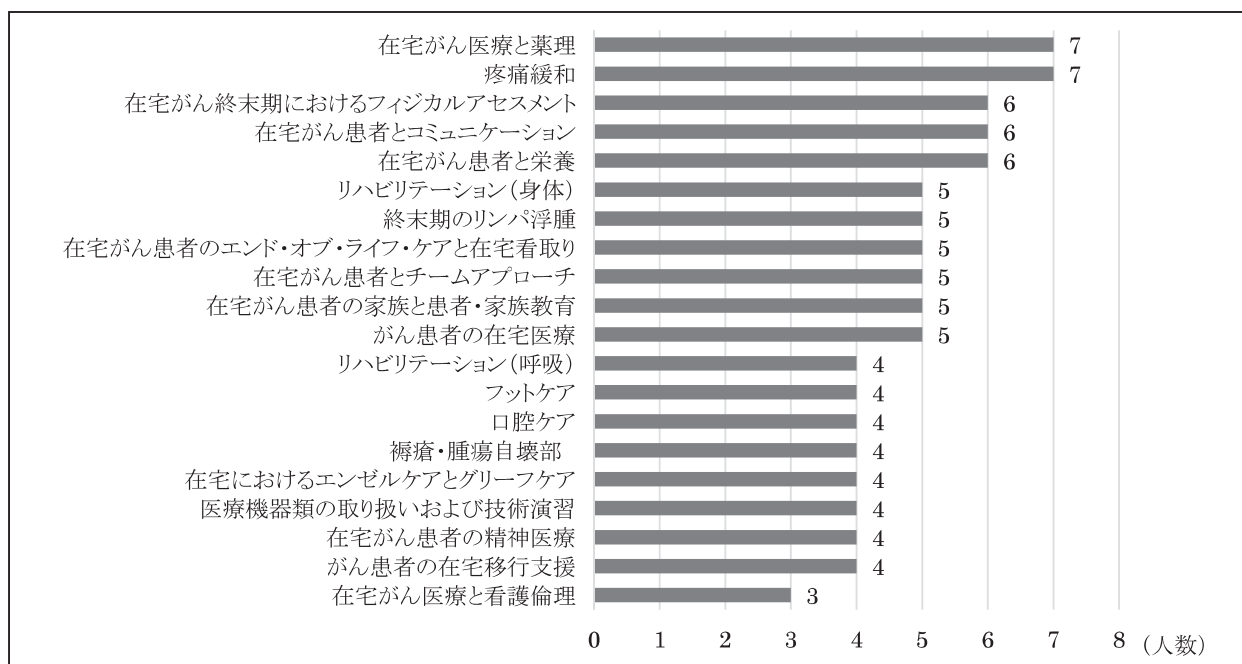


図1. 研修で得た知識・技術の活用

(n=8)

表 1. 在宅がん看護実践力の変化 (n=8)

	目標	向上した	変化なし	低下した
目標 1	在宅移行支援をするがん患者への看護に必要な基礎的知識を習得し、シームレスな在宅移行支援方法や地域の職種との連携を行い、多職種による退院前カンファレンスの開催を行うことができる	4名	4名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● カンファレンスのあり方や、患者様により背景なども違い、検討内容や連携などが違うことも理解できたので、実践力は向上した。 ● 退院前カンファレンスに参加することがなく、実践できていない。 			
目標 2	在宅医療や在宅看取りを望むがん患者の家族への看護に必要な基礎的知識・技術を習得し、在宅がん患者や家族に必要な支援を調整し、看護ケアを実践することができる。	6名	2名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● 学んだことでより自信を持って進んでできるようになった。 			
目標 3	エンド・オブ・ライフステージにある在宅がん患者の身体管理に必要な基礎的知識・技術を習得し身体管理を行うことができる。	6名	2名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● アセスメント能力が向上し、医師にタイムリーに報告、指示を受け、ケアをスムーズに行えるようになった。 			
目標 4	在宅チームメンバー（在宅医・訪問看護・薬剤師・ケアマネージャー・ヘルパーなど）と協働し、エンド・オブ・ライフステージにあるがん患者や家族の在宅看取りの過程に必要な看護ケアを実践することができる。	6名	2名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● 連携、協働でより患者・家族のニーズに応じた必要な看護ケアが行えている。 ● 院内にいるスタッフと連携し、患者が安楽に、また、家族も満足な生活を送れるように関われるようになった。 			
目標 5	在宅看取りをした遺族に必要な看護ケアを理解するとともに、関わった職種のストレスマネジメントが行えるようにデスカンファレンスの場を調整することができる。	2名	6名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● デスカンファレンスを行う時間的余裕がない。 ● その時々、毎日、スタッフ間でのカンファレンスは行っているが、「デスカンファレンス」としての場が調整できていない。 			
目標 6	研修を通して自己洞察を深め、がん在宅看護に対する専門性の高い看護師としての意識をもち、在宅がん医療におけるコーディネーターとして機能することができる。	3名	4名	0名
理由	<ul style="list-style-type: none"> ● リーダーシップを持って看護の在宅療養を支えていけるようになった。 ● そこまでの高い専門性は身につけていないと思う。 ● がんに特化することは困難である。 			

れる内容について、在宅がん患者のアセスメントや実践スキルの向上、状況に応じた判断、根拠に基づく看護実践、多職種との連携・協働、専門職としての助言などがあげられていた。

3. 自己研鑽やスキルアップなど在宅がん看護に取り組む姿勢の変化

自己研鑽やスキルアップなど在宅がん看護に取り組む姿勢について、7名が「変化がみられた」と回答し、1名が「変化はみられていない」と回答していた。変化がみられた内容について、研修や講演会、学会への参加、院内の委員会の出席や進学等があげられていた。

4. 看護実践における新たな取り組み状況

看護実践において「新たな取り組みを行った（行っている）」と回答した者が4名、「新たな取り組みは行っていない」と回答した者が4名であった。新たな取り組みとして、所属スタッフとの学びの共有、学習会やカンファレンスの実施、より

良い看護実践の提案、多職種との連携・討議などがあげられていた。

5. 在宅がん看護を実践する上での困難と困難に対する取り組み（表2）

在宅がん看護を実践する上で、6名が「困難に感じることがある」と回答し、全員が困難に対して何らかの取り組みを行っていた。対象者は、在宅移行支援や病状説明、精神・心理面への支援、調整が必要な状況に困難を感じていた。そして、

表 2. 在宅がん看護を実践する上で感じる困難 (n=8)

● 急性期フロアであり、在宅移行やそれまでの患者の在宅生活に（看護師の）意識が向かない。
● 急性期病棟で患者の思いを聞くことができない。
● 看護師の対応のばらつきにより（利用者が）混乱する 때가ある。
● 本人への未告知
● 主治医の説明のフォロー
● キーパーソンと介護者の意見の相違
● キーパーソンが不在で状況把握ができない
● スピリチュアルペインに対する支援
● 家族が死を受け入れることが難しく、家族の不安が強い
● 若年の最終段階の利用者の点滴に関する考え方

困難に感じることに對して、キーパーソンとの情報共有や不安のケアなどの直接的な看護実践だけでなく、研修での学びの共有、スタッフへの視点の投げかけや看護師・チーム間での方向性の統一などのスタッフへの働きかけ、新たな研修参加や他の専門職から学ぶなど、自身の知識・技術の習得に取り組んでいた。

6. 在宅がん看護を實踐する上で希望する教育支援や取り組み (表3)

在宅がん看護を實踐するうえで、対象者は、スピリチュアルケアやリラクゼーションの技術など【在宅がん看護の實踐スキルの向上】、新規抗がん剤やオピオイドの【知識を深めるための研修】など、自身の知識や技術の向上を望んでいた。また、急性期医療機関と訪問看護の【看看連携とネットワークづくり】、疼痛コントロールができる医師や相談しやすい医師、利用者や家族が話しやすい医師など【協働できる在宅医の存在】、都市部にサービスが集中しているため、【中山間部での在宅療養サービスの充実】など、在宅がん患者・家族にとってよりよい在宅療養支援システムの充実を希望していた。

V. 考察

1. 研修の長期的教育効果について

修了生は、在宅医療や看取りに必要な支援の調整と看護実践、在宅がん患者の身体管理の目標に関する知識・技術を活用しており、1～3年経過した現在において、これらの目標に関する看護実

践力は向上したと評価していた。そして、看護実践能力の向上に、講義だけでなく演習や見学実習の有用性をあげていたことから、修了生は臨床経験をもとに、講義で学んだ知識や技術を演習と実習を通して統合し、在宅がん看護の實踐に活用可能な知識・技術として習得することができていると考えられた。特に、身体症状のマネジメントや栄養、コミュニケーションなど日常生活援助に必要な知識・技術が多く活用されていた。研修は、『日々の看護實踐』を通して学習の動機づけとなり、スキルアップに繋がる⁵⁾と報告されており、修了生は、研修中から日々のがん看護實踐に必要な身体症状のマネジメントや日常生活援助に、習得した知識・技術を活用することで、看護援助の必要性や根拠に基づく看護實踐の重要性を実感でき、学習への動機づけが高められたと推察された。実際に、多くの修了生は研修修了後に、研修や学会参加などの在宅がん看護に取り組む姿勢が変化し、学習会やカンファレンスの実施などの新たな取り組みを行っていた。本研修で習得した知識や技術が、所属スタッフや多職種まで波及していることが伺え、スキルアップにもつながっていた。これらのことにより、修了生の看護実践力が高められたと考えられた。

また、研修目的以外でも、多くの修了生がアセスメントや実践スキル、状況に応じた判断、根拠に基づく看護實踐、多職種連携等において看護実践力に変化を実感していた。これは、修了生が、本研修で習得した知識・技術を臨床で活用する過程を通して、自己の役割や課題を明確にして、主体的

表3. 在宅がん看護を實踐する上で希望する教育支援や取り組み

(n=8)

在宅がん看護の實踐スキルの向上	<ul style="list-style-type: none"> ● もっとスピリチュアルケアが必要 ● リラクゼーションの技術
知識を深めるための研修	<ul style="list-style-type: none"> ● 抗がん剤 (新薬) の知識を深める研修 ● オピオイドに対する知識を深める研修 ● 症状マネジメントの研修
看看連携とネットワークづくり	<ul style="list-style-type: none"> ● 連携のために急性期医療機関の看護師が訪問看護と顔を合わせる機会
協働できる在宅医の存在	<ul style="list-style-type: none"> ● 在宅医が不足していることに対する取り組み ● 痛みのコントロールができる医師 ● 利用者、家族、支援者が話しやすく、相談しやすい医師
中山間部での在宅療養サービスの充実	<ul style="list-style-type: none"> ● 都市部にサービスが集中しているため、離れた所のサービスの充実

に取り組みを行った成果であると考えられた。

以上のことから、本研修プログラムは、修了生の在宅がん看護実践力の向上に寄与し、学習への動機づけを高め自己研鑽やスキルアップなどの行動変容をもたらす有用な研修であったと評価できた。

2. 在宅がん看護の質向上に向けた教育支援の展望

訪問看護師に必要な在宅緩和ケアの実践能力について、看護師自身が訪問看護師の役割を理解した上で、職種との役割を分担し協働すること、チームで情報・目標を共有していくことが明らかにされている⁹⁾。看護師は、チーム医療の中核を担い、リーダーシップとともに調整力を発揮していくことが必要とされているが、多くの修了生は、時間確保の難しさや技術不足により、デスカンファレンスの場の調整や退院前カンファレンスの実施、コーディネーター機能の目標に関する在宅がん看護実践力において、変化がみられないと評価していた。このことから、調整機能においては、修了生自らが研修で学んだ知識を実践に統合し、在宅医療チームの中で役割を開発していくことは研修のみでは困難であると考えられた。チーム医療における看護師の調整能力として「情報をキャッチする能力」「人間関係構築能力」「コミュニケーション能力」「リソース活用能力」「状況の判断能力」「行動力」「目標設定および軌道修正能力」「交渉力」が明らかにされており¹⁰⁾、調整役割の基盤となるこれらの能力を育む教育支援の必要性が示唆された。

訪問看護師は、終末期において苦痛緩和の困難や他機関との連携、訪問看護マネジメント上の困難を抱えていること¹¹⁾や、進行・再発治療期において倫理的問題に関する困難を抱えていること¹²⁾が報告されており、このような困難に直面した訪問看護師は、看護を実践するうえで倫理的なジレンマが生じやすいと考えられる。本調査においても、同じような困難が報告されていたが、半数以上の修了生は、看護倫理に関する知識・技術を活用できていない現状が明らかになった。修了生は、このような場面に直面した際に、習得した

知識をいかに実践に取り入れ、患者・家族・多職種にどのように働きかけるのか、具体的な対応方法とともに調整役割も求められる。看護倫理については研修により倫理的感受性は高められたが看護実践には至らないこと¹³⁾が報告されている。研修生の中には今回初めて看護倫理について学ぶ者も少なくなかった。このことから、研修期間中に実践に活用できるスキルとして習得することには限界があると推察できる。そのため、看護倫理や調整機能については、実際の困難例をもとに事例展開をするなど、より実践に即した継続的な学習支援が必要であると示唆された。

このような中でも、多くの修了生は、在宅がん看護の実践における困難に対して、看護師間・チーム間での調整役割や知識・技術の習得などにより対処していた。また、修了生相互の情報交換や関係性が実践力向上に有用であったと評価していたことから、修了生のネットワークを活用し、困難な状況に対処しながら自己の課題に取り組んでいる現状が伺えた。このことから、フォローアップ研修などを通じて修了生相互のネットワークを育む機会も重要になると考えられた。さらに、修了生は、在宅がん看護を実践する上で、知識や技術を向上させる教育支援や在宅療養支援システムの充実への取り組みを希望していた。このことから、修了生の看護実践上の困難感に着目し、困難への対処を支える知識や技術の習得に向けて支援していく必要性が示唆された。

3. 本研究の限界と課題

本研究は、「質の高い在宅がん看護実践を創造していく看護師養成プログラム」の過去3年間の修了生27名を対象に長期的な教育効果を明らかにすることに取り組んだが、回収率30%の調査結果であり、評価においては限界がある。しかし、在宅がん看護の質向上に向けて、今後、在宅がん看護実践を担う看護師の教育支援内容を具体化し、支援方法を検討していく必要性が見出せた。

VI. 結論

- ・本研修プログラムの長期的な教育効果について、修了生のがん看護実践力の向上に寄与し、学習への動機づけを高め行動変容をもたらしていること、および本研修で習得した知識や技術が、修了生により所属スタッフや多職種まで波及していることが明らかになった。
- ・在宅がん看護の質向上に向けて、調整役割の基盤となる能力の養成、看護倫理や調整機能について実践に即した継続的な学習支援、修了生相互のネットワークづくり、および困難感への対処を支える専門的な知識・技術の習得に関する教育支援が必要であることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆さまに心より感謝申し上げます。

本研究の一部を第31回日本がん看護学会学術集会以示説発表を行った。本研究における申告すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2007) : がん対策推進基本計画, 厚生労働省ホームページ<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_keikaku03.pdf> (参照2017-9-22)
- 2) 白井佳代, 田中優子, 佐藤由紀子他 (2011) : 院内看護師を対象にした在宅医療勉強会の効果の検証 研修前後のアンケート調査より, 癌と化学療法, 38巻Suppl. p91-93.
- 3) 吉江悟, 西永正典, 川越正平他 (2012) : 開業医および多職種を対象とした在宅医療研修の試行および評価 千葉県柏市における在宅医療推進の取り組み, 癌と化学療法, 39巻Suppl. p80-85.
- 4) 宮下光令, 逢坂容子, 山岸暁美, 他. 訪問看護師を対象とした全国的な在宅看取り強化プログラムの評価. 勇美記念財団研究成果報告書 (2009) <http://www.zaitakuiryo-yuumizaidan.com/data/file/data1_2009102112_3118.pdf> (参照2017-9-22)
- 5) 平野文子, 加藤典子, 勝部真美枝他 (2011) : 緩和ケアにおける人材育成研修の成果と課題 - 修了生の看護実践・自己の姿勢への活用 -, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 第5巻, p93-100.
- 6) 前澤美代子, 中込洋美, 伏見正江 (2017) : ジェネラリスト看護師を対象とした緩和ケア研修プログラムの評価, 山梨県立大学看護学部研究ジャーナル, 3, p87-96.
- 7) Morrison, J. (2003) : ABC of learning and teaching in medicine : Evaluation. BMJ. 362(7385). p385-387.
- 8) 中澤葉宇子, 上杉英生, 細谷美紀他 (2013) : がん診療拠点病院のがん看護に関する研修企画担当者を対象とする「がん看護研修企画・指導者研修」の効果に関する追跡調査, 日本がん看護学会誌, 27巻3号, p54-61.
- 9) 廣岡佳代, 川越博美, 渡邊美也子他 (2016) : 在宅緩和ケアを担う訪問看護師に求められる実践能力, がん看護, 21(7), p742-748.
- 10) 林千穂, 大井潤子, 谷本栄子他 : チーム医療における看護師の調整役割 主任看護師に焦点を当てて, 日本看護学会論文集 看護教育, 42, p200-203.
- 11) 古瀬みどり (2013) : 訪問看護師が終末期がん療養者ケアで感じた困難, 日本がん看護学会誌, 27(1), p61-66.
- 12) 徳岡良恵, 林田裕美, 田中京子, 香川由美子, 古谷緑 (2016) : 進行・再発治療期のがん患者・家族に対する訪問看護師の看護実践上の困難と学習ニーズ, 日がん看護学会誌30(1), p45-53.
- 13) 小笠原麻紀, 古郡夏子, 藤田佐和他 (2014) : 高知県における専門分野「がんにおける質の高い看護師育成事業」5年間の成果と今後の課題, がん看護, 19(4), p395-401.